

「釣舟による 東京の橋めぐり」を開催

技士会は、10月13日、異業種他分野等各種施設見学会として「釣舟による東京の橋めぐり」を開催。当日は晴天に恵まれるなか、約40名が参加した。

今回の見学会は、伊東孝氏（日本大学理工学部 社会交通工学科 教授）を解説者としてお招きした。伊東氏は、本誌において「東京の橋—下町の誌上橋めぐり」を連載するとともに、(社)日本土木工業協会の機関誌などでも執筆されている橋の専門家である。また、「勝鬨橋をあげる会」の代表として、再び跳開した勝鬨橋の勇姿を見るべく、活動されている。

当日は、浜松町近くにある古川沿いの船宿「縄定」を出発。隅田川を北上し、日本では珍しい跳

開式可動橋として建設された勝鬨橋をはじめに見学会がスタート。勝鬨橋とともに国の重要文化財（建造物）に指定されている永代橋・清洲橋などを眺望しつつ、神田川へ。

神田川では第一橋梁である柳橋を皮切りに、多数の震災復興橋梁や万世橋・昌平橋といった歴史ある橋を下から見上げ、独特のデザインを持つ聖橋のコンクリートアーチ橋をくぐり、小石川橋から日本橋川に入り南東へ。

日本橋川では、首都高速道路の高架下を旧江戸城の石垣跡を見ながら堀留橋や一ツ橋、錦橋などの特徴ある設計やデザインを見学。岸壁の石段には、当時の工事を請け負った大名の刻印や船舶がぶつかった跡などが残っており、橋とともに河川



ルート（地図）



勝鬨橋を臨む



聖橋の個性的なアーチ



舟から見る日本橋



扇橋閘門



荒川ロックゲート

の歴史を感じさせられた。日本橋をくぐる際は、普段見ることのできない下からの眺めに、目を奪われる参加者が多かった。

その後、豊海橋をくぐり永代橋付近で隅田川に再度合流。小名木川を荒川へ向かって東へ進み、万年橋・高橋などを見ながら扇橋閘門、そして旧中川を經由し荒川ロックゲートへ。荒川ロックゲートは、荒川と旧中川の水位差を調整（最大3.1m、所要時間約20分）しており、扇橋閘門と同様に全国的に珍しいパナマ運河式の閘門。それを舟の上から水位の変化を感じながら通過するという貴重な体験に、多くの参加者が強い関心を寄せていた。

荒川ロックゲートを抜け荒川に出た後、江東区と江戸川区を結ぶ葛西橋・清砂大橋をくぐり、新砂水門で荒川河口から砂町運河に入った。都立第五福竜丸展示館を横目に、夢の島大橋を通過。東雲東運河にあるウォーターフロントの集合住宅を眺めつつ漣橋・七枝橋を通り豊洲運河へ。

運河を抜けて東京湾に出た後は、伊東教授がデザインを決める委員会に参加されていたレインボーブリッジを遠目に、当時の委員会の様子や、橋の形状についての解説などを聞きながら、船宿「縄定」に到着。普段見ることのできない角度から橋を見学し、歴史や建設方法の違いなどを解説いただき、とても貴重な見学会となった。